

特集 育てる誌に寄せられた声から ②

5月号に続き「育てる」に寄せられた声を紹介します。今月は、読者のみなさんの山村留学像がいつそう立体的なものになることを願い、いろいろな立場から山村留学を捉えたものを集めました。

「呼び名雑感」

塩沢 和光（浪合村教育長）

●出典：「育てる」通巻251号 平成元（1989）年6月25日発行

名前の呼び方でその人がらや、関係が良くわかりまたその間がらを呼び方がつくり出すことが多い。「栄ちゃんと呼ばれた」といったのは、時

の総理大臣佐藤栄作の逸話である。人事の佐藤といわれるくらい人心掌握に妙を得、歴代の総理のなかでも記録的な長期安定政権を誇った佐藤さんの理想とする総理は、大衆に愛されることであった。それには「栄ちゃん」と呼ばれるようになりたかったのである。

近くは中曽根康弘総理が、アメリカ大統領レーガンと「ロン・ヤス」と呼びあっているといっ

て、当時貿易摩擦でぎくしゃくしていた日米関係がトップレベルで親密であることを強調したものである。

政界では「角さん」「登ちゃん」「○○ちゃん」などと呼びあつたりしているらしいが、どうも政治家が愛称を使うと体裁づくりが見えみえで、なんとなくどこちなく思える。

政治家に限らず人の呼び方は大切ではあるが、やはり世間体を気にしただけの呼び方ではそろぞらしく聞こえる。

親密な呼び方の表現にはいろいろあるが、その好例の一つに吉川英治の長編小説宮本武蔵がある。小説の主人公である若き日の武蔵とその友人又八が、「たけやん」「又やん」と呼びあうのは生き方が全く正反対の二人ではあるが、竹馬の友の友情を端的に表現しており、さすが文豪の大作であると感心させられる。

今年もまた私の村に都会から山村留学の児童が

やつて来た。月の半分は、それぞれ農家で生活する。子どもらは農家の主人、主婦をお父さん、お母さん、と呼ぶ。預かったこの子どもらにお父さんお母さんと呼ばれると、昨日まで全く他人であつた子どもが、我が子のように思われ、可愛さが増すと子どもを預かっている農家の人たちは一様に述懐する。子どももまたお父さん、お母さんと呼ぶことによつて、自分の両親のように親密になり、なつけるのである。

それでは、子どもらの間ではなんと呼びあうのか。

子どもは年長の子どもに向かつて、「○○にい」「△△ねえ」と呼ぶ。都会から来たばかりの小学校低学年の女の子が「○○にい」というのを聞いたときは、最初は一瞬奇怪な感じを覚えたが、子どもらが呼びあっているのを聞いているうちに、ごく自然でほほえましく感じるようになる。

一年間寝食を共にし、親元を離れて生活する子どもらにとつては友達同士のふれあいがなにより

大切であり、心のよりどころとなっている。村で生活する子どもたちはお互いが兄弟であり、姉妹である。このことは日常の生活を通じて生まれるであろうが、特に年長者をどう呼ぶかは、兄弟、姉妹のように親しくなるうえで大きな影響力があると思われる。

体裁をつくろったり、他人行儀の生活では、親元を遠く離れ、知らない者同士が折角一年間集団生活をする意味がなくなってしまう。親子、兄弟のようになつてこそ山村留学の目的がかなえられる。

「にい」「ねえ」と呼び合うことは、おそらく指導員の教えたことではなく、自然に子どもたちがそうするようになったのであろう。小さい子は年長の子を慕い、年長の子は年下の子をよく可愛がつているが、このことは年長の女の子が常に小

さい子の後からかばいながら登下校している様子一つみてもよく分かるのである。

子どもそれぞれに目的を持って山村留学をしているとはいふものの、まだ両親の膝下で甘えたい年頃の子どもたちである。遠い我が家になつかしいに違いない。しかし一旦決心して来たからには、土地のお父さん、お母さんになつき、「にい」「ねえ」と呼び合つて強く逞しく育つて欲しいと念じている。

「テルの思い出」

佐藤 浩一（八坂学園修園生・ボランティア）

●出典：「育てる」通巻269号 平成2（1990）年12月25日発行

八坂のセンターができて以来ずっとセンターにいたテルが数年前に死んだ。それから少しして新しいテルが来た。前のテルは小さかったがピンと立った耳とリリと上がった尻尾をもった柴犬だった（と思う）。八坂について思いかえすと、必ずそこにはテルの姿があるというほど僕にとっては八坂と切っても切れない関係がある。

僕が留学していた頃、つまり八年ほど昔のことだけど、その頃はテルも若かった。よくテルが鎖をはずして脱走した、ということがあった。そしていつでも切久保の勝野ゆたかさんの家のまわりで発見された。ゆたかさんの家には、たしかメスのこれも柴犬だったと思うが、犬がいたのだ。そしてつかまってはセンターに連れて行かれるのだが、また

少したつと脱走して、ということが続いた。思えばこれがテルの青春時代なのかもしれない。

高校生になってから行事でセンターに行くことがあったが、その頃のテルはいつもねそべって日向ぼっこをしていた。昔はあれほど動き回ったのに、もうおつくうがつて動かない。そして、ある冬の日の朝、冷たくなっていたのだ。寝そべったままの姿勢で。

僕はテルのお墓がどこにあるのか知らない。おそらくセンターの近くの林の中から、休みになると訪れる子どもたちを眺めているのだろう。寝そべったあの姿勢で。



「あのね…」

松倉 雪子（育てる会職員）

● 出典：「育てる」通巻313号 平成6（1994）年8月25日発行

一日の中で子どもたちとかわる時間は、とても短いものです。起床時間から登校までの時間、帰って来て消灯時間までと、限られた時間の中で^{きずな}絆を深めていくのは難しいことかもしれません。「指導者と子ども」という関係以上に「家族、人間」としての信頼感を築かなければ……。考えれば考えるほど、心は焦ります。

それでも日頃、子どもたちと一緒に風呂に入ることや心掛けています。唯一、一緒に過ごせる大切な時間であると言えるでしょう。学校、友達、農家の事など、話の種は無数です。

はだかの気持ちの会話は——とつても生きていくんですよ。

この楽しい時間の中にちよつと興味ある言葉があります。それは「あのね…」という言葉です。何気ない会話の中に出てくる言葉ですが、大切な意味を（私だけかもしれませんが……）持っていることに気が付きました。実はお風呂に入っているとき、この「あのね…」がたくさん出てくるのです。そして次に続く言葉は必ずと言っていいほど、素直な気持ち表れるのです。

「あのね……今日、学校でね……」

今日もまた、「あのね…」がたくさん出てきました。この言葉が出てくると、私はとつてもうれしくなるのです。

たつた三文字のこの言葉を何十回、さらには何千回、何万回と聞くことができた時、本当の絆を結ぶことができるといいなあ—（いや、きつとできる）と自分に言い聞かせる、ある指導員？のお話でした。

「親から見た山留一年目」

小楠 高史（山村留学生保護者）

●出典：「育てる」通巻336号 平成8（1996）年7月25日発行

子どもにとって、また親である自分にとって、山留の一年間はどんな意味を持つのか、これを機会にまとめてみようと思っていたところ、一寸シヨックなことが起きた。それは、週刊現代のグラビアページに山留が取り上げられ、自分の子どもとその友達が比較的大きく写っていたことである。それだけなら何となく嬉しいことがあったというだけなのだが、解説文を読むと、何となく違う、率直に喜べない、そのうちに腹が立つてきた、という気持ちの変化が一〇二分の間に起こった。その解説によると、今、日本の小学生たちは、親が無理をして集めた力ネで、与えた時間や空間の中で「伸び伸びと創意工夫をする」こともなく、「委託加工」されていると言うのである。そういう

たモノの一つとして山留があり、最近はいじめや不登校による希望者が多く、受入先も不足しているとも言っている。大変腹立たしい言い方である。一体この解説を書いた人は、山留についてどれだけのことを調べ、どれだけのことを見たのだろうか。青木先生がどんな気持ちと考えで山留を始めたのか、親たちがどんな気持ちで子どもを送り出しているか、そして、何よりも子どもたちがどんな気持ちで毎日、片道四キロの山道を通い、集団生活の困難を乗り越えているかを知っているのだろうか。と、怒ってみても、そのようにしか山留を理解できない人が居ることは事実であり、それを否定しても始まらないと気を取り直し、これを材料に自分にとっての山留を整理してみた。

我が家で娘を山留に行かせた理由は四つある。

①親から離れて生活することにより、他人に頼らず、自分の意志で、自分が何をしなければならぬか、また、何をしないかを考えらえる力をつける。

② 厳しい環境（自然、生活）の中で一年を過ごすことにより、どんなにつらいことも最後までやり遂げる力をつける。

③ 集団生活をする、また、他人のメシを食う（農家）ことによつて、人には色々な考え方があることを知り、他人の気持ちを大切にすることを知り、そして、世の中自分一人では生きられないことを知る。

④ テレビもない、ファミコンもない。便利なものは何もない生活の中で、我慢すること、工夫することを覚える。

山留に送り出す前は、青木先生の書かれたものやビデオを見て漠然と思っていたことであるが、今整理してみると、以上の四点に集約され、中でも①の理由が一番大きかったように思う。娘の成長を知る機会は、夏休み、冬休み、山留の行事、やまなみ通信など、限られているが、それでも彼女が期待した方向に成長していることはハッキリわかる。例えば、帰省した時に進んで親の手伝い

をする姿勢、阪神大震災がもとで山留生の一員となった友人に見せる心遣い、学年末になつて決める来年の進路の決め方等々である。

一年目にしては十分な成果である。始業式の時の彼女の緊張した顔、五月連休が終わつて別れる時の彼女の淋しそうな顔からは、想像もできない活き活きとした顔が今はある。この調子なら、二年目はさらに大きな成果が、と期待が膨らむ。

一方、山留生の親としての自分を振り返つてみると、九月から大分県に転勤になつたこともあつて、経済的な負担は単なるサラリーマンにとつては、かなりのものであつた。

また、仕事の都合で、メイン行事の収穫祭や親子スキーに参加できなかったことは本当に残念であつた。しかしながら、先生方や父母会の皆さんとのお付き合いは、会社や他の世の中の付き合いとは違つて、職業も肩書きも、利害関係も無い、ただ、子どもたちの成長という共通の目的だけで結ばれた心温まる得難い付き合いであつた。そし

て、それは子どもの成長だけではなく、親自身の

成長にもつながる貴重な体験でもあった。

このように考えてみて、山留は週刊現代に書かれているような「委託加工」では決してないということを、改めて確信できた（確かに経済的負担

は大きいが）。

二年目を迎えるにあたって、来年は今まで以上に積極的に（事情の許す限り）山留の行事に参加したい。そして娘の次は、その弟も山留へ送り出したいと思っている。

「たぬき」

佐藤みよ子（山村留学生保護者）

●出典：「育てる」通巻336号 平成8（1996）年7月25日発行

5月の連休に、親子レクで北相木に行つて10期生と共に、楽しく過ごしてきました。その時の出来事を少し書いてみようと思います。

受け入れ農家ごとに散歩コースを選んでということで、女の子3人は三滝コースに決め、いざ出発。ここは〇〇さんの家、〇〇さんの家にはねこ

がいるとか、犬がかわいいとか、3人でたくさんのことを話しながら、鳥の巣を見ついたり……。よく疲れないものと感心させられ、大人は三滝の入り口まで行つた頃、少々足がもつれ気味でした。入り口の山道を少し行くと桜が咲いていたり、岩たけがあつたりで、子どもたちは前にもまして大声でしゃべりながら歩いて行きました。

そんな時、誰かが発見したのです。「たぬきが死んでる」……。道路のハシに目をやると、それは布きれのように横たわっていました。とつさに私は、「イヤだ、気持ち悪い」と言つてそこをさけ、先に

行ってしまいました。あとの様子は主人が見ていてあとから聞いたことです。子どもたち3人は、「かわいそうに」とそつとなでてやったそうです。

それを家に帰ってから聞き、思わず涙が出そうになりました。親として恥ずかしい気になりました。シンポジウムで山田先生が言っておられたことを思い出しました。「触・臭・味」の体験、まさにその通りでした。今まで生きていた「生」から「死」というものを、子どもたちは触れて初め

て実感したことでしょう。生きることとはどういうことか、死とは何であるかを、体と心で感じたことでしょうか。人を傷つけないやさしい心を学んだのだと思います。

それにひき替え、親としてなんて恥ずかしい行動をとったのだろうと、今回は子どもたちにおしえられました。

これからもたくさんのことを通して目に見えない成長をするのだと、信じてやみません。

「病院」

桜井いずみ（合川町職員）

● 出典：『育てる』通巻276号 平成3（1991）年7月25日発行

サオリをつれて病院へ行つた
お医者さんに「おかあさん」と呼ばれた

「はい」と答えてしまった
やつぱりそう見えるかな

フミをつれて病院へ行つた
お医者さんに「おかあさん」と呼ばれた
「はい」とは言えず
山村留学について説明した

ユウコをつれて病院へ行った
お医者さんに「おかあさん」と呼ばれた
……言葉が出なかった
少しショックだった

山村留学指導員の日常。時には親がわりとなって
医者通いにも付き添う。当時、いずみ女史??歳独身、
サオリ小2、フミ小3、ユウコ小6。

「おつきくてちっちゃくてまるいこと」

北本 良子（合川町まとび学園留学生）

●出典…「育てる」通巻320-321号

平成7（1995）年4月25日発行

私が まとび学園で 学んだことは
おつきくて ちっちゃくて まるいこと

おつきいって

自然の中でまなぶこと

ちっちゃいって

生活の中で

きづかないうちに学ぶこと

まるいって

やわらかくてふわふわしている

人と人とのふれあいの中で

学んだこと

私は この三つを この二年で学んだ